

かまれた場合の応急処置

へびにかまれた場合はまずしなければならないのはかんだへびがなんであったかを確認することです。かみ跡で前牙2本の跡があったら毒へびと判断すると書かれている本もありますが実際にははっきりわからない場合がほとんどですし、ヤマカガシのように奥歯が毒牙という種類もあります。一番確実なのはやはりかんだへびを目で確認することです。そしてその特徴が毒へびのものと一致するかどうかを確かめます。ただしよくわからないからといってよく言われる尻尾を持って鎌首をもたげたら毒へびという確認のしかたは絶対にやめましょう。もし毒へびだったらもう一回かまれる危険性があります。彼らは毒の全量を一気に注入するわけではありません。

もしかまれたのが毒へびと判断されたときは次のような処置が必要となります。もし毒へびにかまれても決して慌てないことです。慌てると脈がはやくなって毒の回りが早まります。マムシやヤマカガシの場合、数時間で手遅れになるということはまずありません。また死亡率自体もほとんど0に近いほど低いのでまずは落ち着きましょう。移動しなければならない場合は走らないようにしてください。もしかなりの時間が経過したとしても血清は十分有効です。

毒へびにかまれた場合の処置というと真っ先に傷口を切開して毒を吸い出し、心臓に近い側を縛るという方法が思い浮かびますが最近はこの方法はしないほうが良いという考え方が一般的です。毒は注入されると瞬時に分散するため切開して吸い出しても排出できる量はわずかなものでかえって傷口を広げてしまいます。また口の中に虫歯などの傷がある場合はそこから毒が吸収されてしまいますし、ヤマカガシなどの毒の場合はたとえ傷がなかったとしても粘膜の表面から吸収されるのでかえって危険です。また縛る方法は毒をかみ傷の周辺に留めることになるためその部分の組織が壊死して深刻な後遺症を残すことにもなります。

血清を打つときは医師の手で

山では医療機関に到着するまでに時間がかかります。ならば血清を携帯すればよいのではないかと考えるかもしれませんがこれはすべき行動ではありません。毒へび用の血清は馬の血清から作られており、これを人体に注入すると場合によっては致命的なショックを引き起こす危険性があります。そのため医療機関では血清を使用する前にショックが起こる可能性があるかどうかを確認し、万一ショックになっても対応できる用意をしてから抗生物質や消炎剤を併用しながら治療します。また血清病と呼ばれる筋肉痛、関節痛、発熱などを伴う後遺症が起きる可能性もあり、場合によっては元の毒による症状よりもひどい場合もあります。ですから素人療法は絶対にしないようにしましょう。